

## 生駒の神話と現在

(文中のURLはクリックしてください。)

(1) 先住日本人(縄文人/神話では**長髓彦**が体现)は、狩猟採集民族であり**無駄な殺し、つまり殺戮**(注)はしません。狩猟採集民族は、自ら食料をつくることはせず自然(神)が授けたものを受け取るのみであり、無駄に殺すことは、自らの生命を維持するに不可欠な食料を無駄にすることですから、殺戮はしないというより不可能なものでした(ですから、自然から命を獲得することで人間の命を守るための弓矢を、命を消す道具である武器として認識することは不可能でした)。

(注) 殺戮: <http://v1.cocolog-nifty.com/blog/files/10.pdf> をご参照。

やがて、先発渡来人(神話では**饒速日命**が体现)が日本列島にやってきて先住日本人と渡来人との矛盾が生じましたが、それはスムーズに乗り越えられ、両者の共存が実現しました。しかし、後発渡来人(神話では**磐余彦命**が体现)がやってきたときは、彼らと「先住日本人+先発渡来人」との矛盾を乗り越えるには相当の努力が必要でした。その苦闘を今に伝えているのが生駒の神話(長髓彦神話と饒速日命の国譲り神話)※です。

※「**生駒の神話(長髓彦神話と饒速日命の国譲り神話)** <大要>」は下記URLへ

<http://v1.cocolog-nifty.com/blog/files/1>

かかる歴史の中で、日本人は「**戦い(殺戮)を忌避する精神(命をなにより大切に作る精神)**」を培っていったのです。

(2) しかし残念ながら、「生駒の神話(長髓彦神話と饒速日命の国譲り神話) <大要>」の【1】に記されているように、「**国家**」というものの強まりとともに「**戦いを忌避する精神**」は否定されていきました<「国家の成立に伴い、問題の解決に暴力を用いる行動理念が社会の軸になっていった。」(<http://v1.cocolog-nifty.com/blog/files/08.pdf>) ご参照>。長髓彦の子孫とされるアテルイも長髓彦の精神を貫こうとしたが果たせませんでした(アテルイは同土モレと共に、大和王権と日高見国が戦わずして講和するために敵の心臓部である京都の都まで出かけましたが、河内国杜山で無残にも斬刑に処されてしまいました)。国家の権力を縛るものがない時代にあっては「**戦い(殺戮)を忌避する精神**」は貫くことは**できなかった**のです。これを「**アテルイの悲劇**」といいます。「悲劇」とは、「避けられない宿命」をあらかじめ知らされていない人間は、不屈の意志・エネルギー・激情をもって奮い立ち、また、闘争・苦悩・恐怖にもがくことになる。最後には人間を越えた宿命(時代がもたらす限界)に敗北するとしても、それと相対する人間は異常な緊張の中に力を集中する。そこに、その時代に生きる人間の美しさ(=壮烈な高貴)が描かれることです。

そして、「国家」による個人への抑圧が最大限に達した状況(ファシズム)が引き起こした戦争(アジア太平洋戦争)が、「一億総玉砕=国家が自国民・自民族全員に死を強制=国家による自国民・自民族皆殺し」により「国(祖国)」を滅亡させるという、究極の命の尊厳をないがしろにする施策推進による未曾有の殺戮(日本史上殺戮のピーク)をもたらしてしまいました。それに対する劇烈な反省・反発が「**戦いを忌避する精神**」の否定を否定し、「戦いを忌避する精神」を復活させたのです。人間も生き物です。生き物が、自分の命を脅かすものから身を守ろうとするのは本能です。日本人が、敗戦と同時に「戦いを忌避する精神」の否定を否定したのは民族を存続させようという民族の本能に基づくものでした。そのため、「戦いを忌避する精神」の否定の否定によってより強いものとして復活した「戦いを忌避する精神」は、より強い普遍的無意識(魂の命根/無意識の本能) <これらについては、後に再述>となったのです。これは、国家が否定しようとしても、一時的に封じ込めることはできるかもしれないものの、決して消滅させることはできないものです。

(3) Aの否定の否定はAの復活ですが、否定される前のAがそのまま復活するわけではありません。否定された状況の中から復活したのですから、より強いものとして復活します。否定される前の「戦いを忌避する精神」は弓矢で保証(弓

から放たれた矢は武器として敵を射抜くのではなく、いく本もの矢の障壁を敵が退くまで繰り返して敵の前につくことで敵の侵略するという邪悪な心を失わさせて敗走させる)される精神でしたが、「戦いを忌避する精神」が否定されていた時代に弓矢はすっかり武器(命を消すもの=殺戮するもの)に変質させられてしまいましたから、邪悪な心(命を消そうとする心)を射抜くことはできなくなりました。

それでは、復活した「戦いを忌避する精神」を保証するものは何でしょう。それは「言論(意思)」です。長髓彦は磐余彦命軍の前に「戦いを忌避する精神」を貫徹するのに大量の弓矢(邪悪な心を射抜くもの)を必要としました。同様に、今日の「戦い(殺戮)を忌避する精神」を貫徹するには大量の言論、つまり「**世界中からの殺戮を許さない言論(意思)**」が必要です(※1)。この邪悪な心(命を消そうとする心)を射抜く「世界中からの殺戮を許さない言論(意思)」を必ずや日本人が獲得することを日本国憲法は確信しています(※2)。日本人は国譲り神話をつくり持っている民族だからです。

(※1)「世界中からの殺戮を許さない言論(意思)」を獲得する道については、

この文章(<http://c1.cocolog-nifty.com/blog/files/01.pdf>)の「(12)日本を守る道」をご参照ください。

(※2)日本国憲法前文「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」

国防の命題「他国から物質的な力である武力で攻撃・侵略されたとき、言論による反撃は武力による反撃の代わりはできない。しかし、世界中からの言論による反撃は、武力をはるかに凌ぐ物質的な力となる。」(※)——武力をはるかに凌ぐ物質的な力である「世界中からの言論による反撃」が国を守る力です。国譲り神話と長髓彦神話の真意はこの命題に行き着くように思います。

(※)この命題が抛るのは<「世界中からの殺戮を許さない言論(=意思)」が物質的な力を持つメカニズム↓>です。

<http://c1.cocolog-nifty.com/blog/files/02.pdf>

(4)「アテレイの悲劇」がもたらされた時代とは違って今日は、**国家の権力を平和憲法が縛る時代**です。「戦い(殺戮)を忌避する精神」を貫ける時代となっているのです。

平和憲法は、アジア太平洋戦争という地獄の炎の中から復活した「戦いを忌避する精神」を2度と失わないことを、これまでの無数の戦争・戦闘によって無念の死を遂げたすべての人々に誓う書であり、約束する書です。地獄の炎が日本人に託した誓いの書・約束の書はいかなる力をもってしても滅することはできません。なぜなら、戦後日本人の**戦争忌避精神は集団的無意識となっている**(<http://pdf.cocolog-nifty.com/blog/files/52.pdf>)からであり、**憲法第9条は無意識に根ざした日本人の「文化」である**(<http://c1.cocolog-nifty.com/blog/files/23.pdf>)からです。

(5)縄文時代、人々は狩猟・採集・漁労によって命を繋げました。つまり、何千年もの間、狩猟・採集・漁労によって得た動植物から命を与えられ続けました。そこでは、他者は命を与えてくれる存在であり、殺戮する存在ではなく、他者を殺戮するという概念はなかったのです。こうして縄文時代を通じて、「**他者より命をいただく。他者は自分にとってかけがえのない存在なので、それを抑圧し、殺戮するなどとは思いもよらない**」という**普遍的無意識(魂の命根/無意識の本能)が形成された**のです。

※普遍的無意識(集団的無意識)については、<http://c1.cocolog-nifty.com/blog/files/02.pdf> 参照。

しかし、弥生時代後半より「国家=統治機関=権力=抑圧機構」の力が強まっていく中で、その集団的無意識は抑圧され封じ込められていきました。そして、「国家=統治機関=権力=抑圧機構」を制限・縛るものが不在であった時代の千数百年間には、その集団的無意識は抑圧され封じ込められ続けました。

その結果防ぐことができなかったアジア太平洋戦争の終結を機に、「国家=統治機関=権力=抑圧機構」は、制限・縛らなければ民族・国民を滅ぼしかねないという痛切な反省から、「国家=統治機関=権力=抑圧機構」を制限・縛る日本

国憲法が生まれ、「国家＝統治機関＝権力＝抑圧機構」が制限・縛られる時代が到来しました。それにより、「他者より命をいただく。他者は自分にとってかけがえのない存在なので、それを抑圧し、殺戮するなどとは思ってもよらない」という集団的無意識は抑圧され封じ込められるという状態から解放されました。

こうして、その集団的無意識は、戦前には押さえ込まれてきた「**立憲・人権平和憲法・反戦・国際友好・自由・人権拡大・平等志向・協力重視**」という政治的潮流を形成しました。しかし、アジア太平洋戦争を反省しない勢力、つまり「国家＝統治機関＝権力＝抑圧機構」を制限・縛ることをよしとしない勢力は、戦後一貫して「憲法は押し付けられたもの」を合言葉に（この合言葉をいう者は、米国に押し付けられたと表面上はいうが、集団的無意識に押し付けられたと感じている。本当に米国に押し付けられたと感じているのであれば米国を崇拝し米国に従属するはずがない）「**非立憲・非人権非平和憲法・好戦・排外・統制・人権制限・格差容認・競争至上主義**」という政治勢力を形成しました。

その結果、戦後の日本では、この前者と後者の2つの潮流・勢力による、いわば武力行使なき内戦が続いてきました。この内戦（現在、反安保 vs 安保強化／立憲 vs 非立憲／沖縄反基地 vs 沖縄基地強化／反TPP vs TPP推進／反原発 vs 原発再稼働、など）は、集団的無意識は消滅することがないので、いずれは、前者の勝利で終わりますが、それがいつごろになるかは、いまのところ見通せません。

なお、「夜と霧」を書いた فرانクルがアウシュヴィッツ収容所で人間を見つめて出した結論は、「**この世には二種類の人間がいる**。品位ある善意の人間とそうでない人間だ。」ということでした。品性とは、人の気持ちや幸せを考える能力のことで、品位とは、人の気持ちや幸せを考える態度のことです。戦後日本の武力行使なき内戦は、**品性・品位ある**（それゆえ、美しい壮烈・高貴な）**人間と品性・品位なき**（それゆえ、醜い卑劣・下品な）**人間**という二種類の人間の間の武力行使なき戦いといえます。フランクルの悟った真理は、現在日本の政治状況と符合しています。今日の日本において前者の人間は、縄文時代に形成された「他者は自分にとってかけがえのない存在なので、それを抑圧し、殺戮するなどとは思ってもよらない」という集団的無意識（魂の命根／無意識の本能）を発現させている人々です。

ついでながら、「他者は自分にとってかけがえのない存在」という思想は、仏教の根本の教え、つまり、「**縁起の法**（すべてのものは互いに支え合っている）」でもあります。紀元前5世紀に南アジアの地においてブッダ（仏陀）が悟った教えと極東日本の地で縄文時代に育まれた集団的無意識は同じものでした。仏陀の教え（縁起の法）〈注1〉は、日本人の集団的無意識を意識化させるものといえます。それが今日の日本において、仏陀の教えを取り戻そうという動きを、まだ大きくはありませんがもたらしているように思います。なお、現代ヨーロッパを代表する思想家のジャック・アタリは、「自分をコントロールすることで他者との争いを避ける。これがアジアの文明の素晴らしさだ。」〈注2〉と述べています。

〈注1〉仏陀の教えについては、「**仏陀の教え（仏教）の簡潔な説明**」（下記URL）ご参照。

<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/32.pdf>

〈注2〉ジャック・アタリの論述（下記URL）⇒<http://c1.cocolog-nifty.com/blog/files/08.pdf>

～この文書（生駒の神話と現在）は、「**生駒の神話**」（下記URL）に掲載されているものです。～

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>